

第8回 生駒市環境審議会ごみ減量化専門部会 議事録

【日 時】平成22年4月26日(月) 午後1時～4時

【場 所】生駒市役所 401・402会議室

【出席委員】森住部会長、藤堂部会長代理、中西委員、高木委員、大内委員、
谷川委員、小林委員

【事務局】中谷環境事業課長、辻中環境管理課課長補佐、竹本管理係長、
吉岡事業係長、(株)地域計画建築研究所長沢

1 開会

開会宣言

資料確認

傍聴者確認 0名

2 議事録への署名について

議事録の署名は小林委員、中西委員

3 案件

(1) ごみ質調査及びアンケート調査の結果について

・アルパックより資料の説明

藤堂委員：調査結果では不純物の混入は少なかった。他の地域も大差はないと思われる。

全市で実施しても、分別が良好な状態を得られると思う。ただ、燃えるごみの中に、プラスチックに限らず紙類などリサイクル可能なものがかかり混じっている。その辺りの認識を深めることができれば、市のごみ総量も減少させることができるのではないか。プラスチック製容器包装分別収集の広報と同時に、他のリサイクル可能なものについて分別を促す啓発を行ったほうがよい。

事務局：ありがたいご意見である。容リプラは全市収集を進める方向だが、紙類の分別がさらに進めば資源化率も向上する。紙・新聞・段ボールを市が分別収集している他市事例があるが、生駒市は将来的にはわからないが、当分はそこまでいけない状況である。当面、集団資源回収をより充実させたい。周知・啓発と行うと共に、登録団体数・紙の対象品目を増やしたい。

中西委員：集団資源回収とは何か。

事務局：自治会、子供会等の団体が集団資源回収を行うということで市に登録する。団体で新聞・雑誌・段ボール・牛乳パック等を集め、回収業者に渡す。この時、業者から団体へいくらか支払われることもある。業者は受け取った量を記載した仕切り伝

票を団体に渡す。年2回、団体が仕切り伝票を市に届け出れば、市は4円/kgの補助金を支払う。団体はそれを活動資金にできる。現在、123団体ある。回収量はここ数年横ばい。今後、団体数・回収量とも増やしたい。業者から支払われるお金と市の補助金の両方を受け取れるので、取り組むメリットはある。

大内委員：市から補助金が出るのは、市のごみを減らしたから、ということか。

事務局：その通り。ごみ減量のためにご足労いただいているというのが補助の理由。

中西委員：回収業者から売却代金を受け取ったとしても4円/kgの補助金が出されるのか。

事務局：その通り。

中西委員：補助金は業者でなく団体に行くのか。

事務局：その通り。以前は業者にも1円/kgの補助を出していたが、昨年度から業者への補助金は止めた。

中西委員：登録団体が増えないのはなぜか。

事務局：よくわからない。啓発等、見直していきたい。

藤堂委員：当自治会も集団資源回収を行っている。自治会によってやり方は様々である。

当自治会では、月1回、あるご家庭のガレージを借り、ステーション方式で実施している。集団資源回収の1週間ほど前に、プロの業者が新聞紙等の回収を行う旨のチラシを各戸に配布している。それに出す人もかなりいる。ごみ袋をもらえる等、何らかのメリットがあると思われる。そのため、自治会の集団回収に出す人が伸びないという悩みがある。

小林委員：集団資源回収はいつから実施しているのか。

事務局：十数年前からである。

小林委員：子供会に出した資源物を業者が勝手に持ち帰るといった問題が発生している。

集団回収は市のお知らせとは違う紙なので、この日はこの紙を見る、この日はあっちの紙を見るという具合でややこしい。統一していただければありがたいが、集団回収は自治会が決めているのか。

藤堂委員：自治会が各業者と交渉して決める。

小林委員：その辺りがよくわからなかった。うまくいっているので市としてもこのまま続けたいということか。

事務局：さらに充実させていきたい。そのために啓発にも力を入れていきたい。

小林委員：お菓子の箱もつぶして出してよいのか。

藤堂委員：業者が各団体に回収できるものの内容を掲載したチラシを配布していると思う。

それに従えばよい。当自治会では紙であれば出せる。古着・靴・かばんも出せる。

大内委員：回収内容のお知らせを市から行うことは無理か。

事務局：業者も様々であり、一律の案内は無理である。市ができるのは集団回収への協力を呼びかける啓発である。20人以上で団体登録ができる。

小林委員：これに出していない人は燃えるごみに出しているということになるのか。

事務局：そのケースと、個人的に業者に依頼しているケースがあると思われる。

小林委員：当自治会では古着は回収していないので可燃ごみに出している。

事務局：集団資源回収では古着はたいてい集めている。回収品目にプラスするよう業者をお願いすればよい。

中西委員：資料 p 3、「異物の割合は、ひかりが丘が約 11%、西松ヶ丘が約 16%であり、一般的な 20%程度と比べて、異物の量は少ない」と書かれている。しかし、この 2 地域を生駒市の標準と考えてよいのか。ひかりが丘と西松ヶ丘の間にも差がある。他地域は分別を全くしていない状態からスタートする。

アンケート調査の結果の p 10、「問 10 プラ製容器包装分別収集の参加を増やすための方策」の 2 番目、「参加者を増やすための主な意見」の最初に「分別の意義、処理方法、リサイクルの活用方法、経費等、メリットやデメリットも説明」とある。皆さんにお聞きしたいが、こういう説明を受ければ協力率が上がると思われるのか。それがよくわからない。このような説明を受けてもしない人はしないのではないのか。むしろ、回収頻度を増やす、回収方法を便利にする、知らない人に知ってもらうことに力を入れたほうが増えるのではないのか。限られた労力を有効に使うために、効果があることに力を入れるようにしたほうが良いと思う。

小林委員：アンケート調査の自由意見を見ると、テレビ放送で分別は意味がないといった番組を見て、分別をやめたという人がいる。分別の方法をわかりやすく伝えると共に、やはり分別の意味を伝えることも必要と感じる。全市民に配る必要はないが、疑問を持った人に対して、分別したものがどのようにリサイクルされているのかなど、意義・経費等について答える形もあったほうがよい。

中西委員：疑問をもった人に対して、我々はこう考えて取り組んでいるという説明は要る。それは私も同意見である。ただ、価値観の違いから分別しない人に対して、理屈を通して説得するのはさほど効果が期待されず、労力を使う必要はないと思う。

森住部会長：p 2 の表「分別排出率の算出結果」について。西松ヶ丘では、燃えるごみに含まれていたプラボトルは 7.04kg、プラ製容器包装に含まれていたプラボトルが 1.72kg であった。プラボトルは燃えるごみに出した割合が非常に多い。要因は、汚れ付着のため分別されなかったのか？

アルパック：洗にくいという理由は考えられる。あと、シャンプーのボトルはふたを外さないといけない等。

森住部会長：汚れた物は可燃ごみに入れるよう指導している。その反映ではないか。

アルパック：どこまで洗うかにも左右される。

森住部会長：家庭ごみ中のプラごみの中で、汚れていると判断できるものほどの程度だったか。

アルパック：他の都市で汚れの落ちにくいものの割合を調査したことがあるが少なかった。キムチの袋、バターの容器など、べたべたしてふき取りにくい物は汚れが落ちにくいものもあるが、それ以外の物は少し水につけておけば落ちる。

森住部会長：家庭ごみ中のプラ製容器包装の量を 0.8 で割れば、分別排出率はもっと上がる

のではないか。

アルパック：2割もないため、0.8で割るのが妥当とはいえない。正確な数字は今はないが、1割もなかった可能性もある。汚れが取れないものはわずかである。

森住部会長：1割もないなら修正の必要はない。この数字でよい。全品目平均の分別排出率は2地区とも25%程度である。プラスチック製容器包装全体の1/4しか分別排出されないという結果である。

アルパック：現状はそうである。

藤堂委員：汚れているという判断基準に、プロと一般市民では差があるのではないか。

アルパック：それはあると思われる。

藤堂委員：これは汚いと思って分別せず、燃えるごみに捨てている部分について、本当は分別に出すべきというのがわかりにくい。私の近所でもそういう意見がある。

小林委員：きれいに洗うのは難しい。

森住部会長：どこまできれいにするのかの基準がないこともある。今の広報のレベルでは全体の1/4の回収量となる。これを上げる方策はかなり難しい。

中西委員：ただ、協力しない理由として、モデル地区だから、というのがある。そのフクターを除くと数値が変わる可能性がある。

(2)モデル事業について

・事務局より資料の説明

事務局：現在は2地区とも月2回の収集であるが、1地区は週1回、もう1地区は月2回で実施したいと考えている。ご意見をお聞きしたい。

森住部会長：アンケート結果では約75%の人が現状でよいと答えている。

事務局：ただ、保管するにもかさばるという面があり、収集頻度を増やして実施することを考えた。

森住部会長：現状に不満なのは25%の人だけである。

事務局：月2回だけでよいのか、この場で確認したい。

大内委員：私は月2回でよいと思う。かさばると感じる人は、かさばることをどうにかするよう考えてほしい。

藤堂委員：私は一度出し忘れたことがあり、全部たたんで入れ直したらかなり減量した。

大内委員：ぐるぐるっと巻いてセロテープで止めるやり方もある。

藤堂委員：ただ、それだけの手間をかけてくれる人がどれぐらいいるのかという問題もある。プラスチックの量も家族構成や買うものによってかなり変わる。市として、月2回の全市収集を予定しているのであれば、モデル地区事業も2回でよいと思う。

事務局：できれば月2回収集で本実施したいと考えている。分別して回収する量が多ければよいのではなく、プラスチック製容器包装入りの商品をできるだけ買わないことが大事という意見もいただいております。月2回でいきたいとは考えている。

森住部会長：原則はそれでよいと思う。ただ、出し忘れがあると月1回になる。これを解決するノウハウがいる。マンションなどで、排出場所が決まっている場合は収集日でなくても出せる。例えば、行政がボックスを提供するのでスペースがあるところは置いてよいと、そういうオプションを設けてもよいのではないか。

事務局：それは難しい。

森住部会長：現段階で難しいかどうかは問題ではなく、そういう類の対策が要るのではないかということである。他の自治体でも例があるが、屋根付きの小さな小屋・物置みたいなものを設置し、資源系のごみを保管する。その設置に補助金を出せないのか。

事務局：きちんとしたステーションを作るための補助金はある。移動式でなく固定型のステーションの場合に限られる。

森住部会長：それに資源系の置き場を含めればよいのではないか。

小林委員：もう一度説明してほしい。

森住部会長：説明し、自治会で決めるようにしてもらえばよい。

事務局：ただ、予算はほとんどとっていない。

森住部会長：考え方として、こういうオプションもあり得ることを念頭においてほしい。

藤堂委員：ごみを直送にして、リレーセンターをリサイクルに使う構想があることを伺った。ここに資源ごみを持ち込めば受け付けるようにできないか。資源ごみをためて保管している人は運搬する意思もあると思われる。また、市の姿勢として、資源化・リサイクルに積極的に取り組んでいるというPRにもなる。将来的にそういう場所を作っていただければありがたい。

森住部会長：選択肢を増やして対応することが、特に資源回収には大事である。さほど費用もかからない。

大内委員：リレーセンターでは持ち込みできるのか。

事務局：粗大ごみは電話申込制スタートと共に直送になり、可燃ごみも直送の方向で検討している。リレーセンターには個人の持込ごみの受入機能は残すつもりである。粗大ごみをリユースできる「リサイクル工房」にしてほしいというご意見もいただいている。今後、リレーセンターの活用について検討していきたい。

藤堂委員：自治会連合会で、日進市を訪れた際、市役所のすぐそばにリサイクル拠点があり、資源物を置いていける場所もあった。そういうふうに皆が気軽に持ち込める場所がほしい。職員だけで対応が難しければボランティアを募ったらどうか。

森住部会長：日進市は面白いモデルである。谷川委員が行っているのは陶器が対象であるが、日進市はすべてのものについて行っている。リレーセンターにそういう機能を持たせるのは面白いアイデアと思う。生駒市・奈良市は持ち込みごみが多いのが特徴である。自分で持ち込むのはよい習慣と考えている。この習慣を利用し、リレーセンターの活用策を考えたい。モデル事業で収集頻度を増やす必要はないのではないか。

事務局：了解した。

中西委員：2週に1回でよいという人は59.9%、1週間1回にするべきという人は36.8%いる。週1回にするべき理由は何かよくわかりませんが、週1回収集してもらわなければ保管場所に困るといふ人は、どこかに出せる場所が必要と思う。月に何回収集するだけでなく、リレーセンター活用策も含めて、週1回収集を望む人に対応する策を検討することが必要と思う。

森住部会長：藤堂委員の自治会ではボックスはないのか。

藤堂委員：ない。

森住部会長：資源系のごみを含め、ボックスを置くのはよいアイデアと思う。

事務局：設置するスペースがなかなかない。

森住部会長：自治会に探してもらえばよい。

藤堂委員：当自治会の全戸のごみ袋が入る大きさのボックスを設置するスペースはない。仮に公園の一角に置かせてもらったとしても全戸分を収納するのは難しい。

大内委員：午後収集にも抵抗がある人は、ボックスが置かれることにも抵抗があるのではないか。

藤堂委員：通常のステーションにボックスをずっと置いておくのは不可能である。住宅地ではボックスを設置する場所が非常に限られる。ボックスを小さくすると置くことはできるがごみ袋を収納しきれない。目的に沿った形でボックスを設置することは難しい。

森住部会長：1 m³程度のスペースがあれば、出し忘れた人が入れることのできるボックスを置くことは可能と見られる。

大内委員：マンションではすでにやっている。鍵をかけられるボックスを使っている。

森住部会長：市として、そこに出すよう言えばよい。

中西委員：マンションでは、ごみの種類によって置く場所を決めているのか。

森住部会長：2週間に1回という原則を守りながら、各地域でオプションとして対応策を検討するという基本方針にしたらどうか、というのが私の意見である。

小林委員：臭いが発生すると思う。だから、リレーセンターへ持ち込めるのがよい。

森住部会長：リレーセンターへ行けない人もいる。だから、選択肢を増やすのがよい。モデルの2地区ではどのようなオプションが可能かを検討する、という提案である。

藤堂委員：びん・缶、ペットボトルの収集もあり、家の中あるいは庭などで資源物を保管している。たまっても保管が不可能ではない。

森住部会長：たまったら保管するよう指導する方向もある。

大内委員：ペットボトルはかさばるが月1回の収集である。家での保管が無理難題ではない。

中西委員：私が指摘しているのは出し忘れた人の対策ではなく、週1回収集を希望している人への対策である。出し忘れた場合は仕方ないとあきらめてもらえる。プラスチックごみを減らすことについて。現在の流通体制では、プラスチック製容器包装を

抑制する手段があまりない。詰め替え商品を買う程度しかない。

藤堂委員：家で保管しきれないほどプラスチック製容器包装がたまり、週1回収集を望む人には、こういうオプションがあると市が提示することは必要と思うが、月2回を予定しているのなら、モデル地区で週1回を実施する意味はそもそもないのではないか。

事務局：そういう面もある。また、モデル地区で週1回実施した後で、全市での開始時に月2回に戻すと抵抗感が出る可能性がある。

小林委員：以前は、週1回収集を実施し、量が増えるかどうかをみたいという観点であった。

事務局：そういう経緯もあった。

中西委員：月2回でよいと思われる。週1回を望む人が、本当に切実に要望しているのかどうか、という問題もある。月2回で実施し、それに対してどのような意見が出てくるのかを見て対応を考えればよいと思う。

森住部会長：月2回収集とした上で、対応策をメニューとして提示し、選んでもらえばよい。メニューを探し出し、2地区に意見を聞くことにしたい。他に改善してほしい点はないか。

藤堂委員：ある程度の期間、分別を実施しているが、特に混乱は起きていない。

中西委員：モデル地区事業が始まった当初の問題点はなかったか。

藤堂委員：食品がついたままの状態を出している人がいた。猫やカラスが食い破り、散乱していた状況があった。後片付けの当番の人が困るので、きれいなものを出すようお願いした結果、その困りごとはなくなった。ただ、分別率が下がったかも知れない。可燃ごみのようにネットを被せて出すのでなければ、ある程度きれいなものを出すようにしていただかないとごみ置き場の管理に困る事態が発生する。

中西委員：アンケートの自由意見でも、どの程度きれいにしないといけないのかわからないという意見が多数ある。モデル地区では、経験則でこの程度は出せると個々の人が判断しているが、当初はわからない。広報や案内で、基準を示すことを検討してほしい。主観に任せると大きな差が生まれる。

事務局：モデル2地区には、こういうものを出すようにとカラー刷りで案内している。マヨネーズやケチャップは出さないように記載している。これらは洗浄に水をたくさん使い、かつ単独浄化槽では浄化されずに流れてしまう恐れもある。そういう懸念があり、除外している。他市ではマヨネーズ等も出せるが、生駒市ではこの形でよいかどうか。

森住部会長：生駒市ではこういう考えの元で対象品目を決めた、と説明すればよい。

中西委員：どこかで線引きをしないと仕方がない。

藤堂委員：チューブ容器は洗いにくいため、出さないようにと言われるほうが楽ではある。

森住部会長：分別協力率を上げるためにどのようなソフトウェアがあるのかを事務局で考え、次回、提出してほしい。その中から、藤堂委員のご意見を踏まえ、これならや

れるというものを選び、実施したらどうか。その結果を2地区に常にフィードバックし、協力率が上がるかどうかを見る。

大内委員：現物を見たいという人が多いと思われる。人が集まる時に、印刷物ではなく実物を展示してほしい。

事務局：全市実施の際の説明会では実施したい。

森住部会長：全市実施の際の説明会を想定し、2地区の方々にどのような説明をすれば協力率が上がるのか、そういう社会実験を実施する

大内委員：それこそ、生駒山スカイウォークの時に実物があればよい。

森住部会長：よいアイデアである。

(3)プラスチック製容器包装への対応に対する評価について

・森住部会長より資料の説明

森住部会長：可燃ごみの収集費用はいつの実績か。

事務局：平成21年度の実績値である。

森住部会長：「4. 経済性」の選別費用4万円/トンとは何か。

事務局：第3回の専門部会において、リサイクル方式を検討していただいた。リサイクルを市内の業者が選別・圧縮・保管をするのか等、処理方式を4種類に分けて検討した。また、選別・圧縮業について調査を行った。その際、4万円/トンという数値を使っていたため、ここでも用いている。

森住部会長：これが相場と言えるのか。見学した寝屋川市の4市の施設では、これほど高くなかったのではないか。他市の費用をいくつかアルパックに調べてもらうようにしてほしい。競争入札している市ではかなり安くなっている。相場であると言える数値を入れなくてはならない。

事務局：調べるようにしたい。

森住部会長：収集費用は、システムAよりシステムB-1、B-2が高くなっているが、可燃ごみだけの費用はシステムB-1、B-2が低い。どのような根拠で低くなっているのか。

事務局：システムB-1では、システムAより1300トン減る予想になっている。平成21年度の可燃ごみ総量が21,250トン、これから1300トンが下がるということは、割合にすれば5.87%下がっている。ただ、収集費用は5.87%も減らないだろうということで、この半分程度の割合が下がるという想定をした。

森住部会長：なぜそういう想定をしたのか。

事務局：根拠はない。

森住部会長：それでは突っ込まれることになる。

事務局：収集量が減るため、費用もある程度減ると思われる。

森住部会長：ごみが減ったら業者に払うお金も減るのか。

事務局：1300トン程度ではほとんど変わらない。

森住部会長：業者との契約において、収集量が減れば委託費用も減るといふ、変動する仕組みになっているのか。

事務局：なっていない。

森住部会長：ならば可燃ごみ収集費用は、システム A とシステム B-1、B-2 とで変わらないことになる。

事務局：そういうことになる。

藤堂委員：業者との交渉において、現在よりプラスチック分別収集費用を上乗せするといふやり方をしているのか、大枠の予算の中でプラスチック分別収集も行っていただくよう交渉しているのか。

事務局：そこまでの交渉はまだやっていない。業者とは長期契約のため数%ごみ量が減った程度では費用は変わらない。ただ、収集ルート見直し、それにプラスチック製容器包装収集をどうかませるのかを考え、できるだけ効率的なものにし、全体費用を下げていきたい。可燃ごみ収集費用とプラスチック製容器包装収集費用を単に足し合わせる結果にはしたくない。

中西委員：今の説明は理解できる。ただ、ごみ量が減るので費用も減るといふのは、説明を聞く限り、根拠がない。収集ルートの見直し等によって費用を圧縮するという説明は根拠がある。収集ルート見直しにより可燃ごみ収集費用は圧縮していくが、プラスチック製容器包装分別収集が加わるため、トータルとしては若干上がる。そういう説明をしたほうがよい。

藤堂委員：可燃ごみ、プラスチック製容器包装を合わせて収集ルート見直しを行うのであれば、ここには両者を分けて記載するのではなく、トータルの収集費用として、市がこの程度にしたいと考えている金額を記載すればよいのではないのか。2つを分けると、それぞれの金額の根拠を問われることになる。

森住部会長：その考えでよいと思う。

アルパック：プラスチック製容器包装の収集費用は、この資料では 1200 トンと想定して計算している。1300 トンでも変わらないと見られる。ここに記載している費用は市内の業者に委託した場合で、1 回の収集に車両が何台必要かを計算した。600 トンの場合で 2 トン車 3 台、4 トン車 11 台、計 14 台。1200 トンの場合には 2 トン車 3 台、4 トン車 22 台、計 25 台。これに 1 台当たりの年間維持費（人件費・機材維持費等）を掛け、算出した。

森住部会長：1 台にかかる費用に必要な台数を掛けた結果であり、わかりやすい。この数値はこのまま使ってよいと思われる。「焼却費用」、「容リプラ市負担額」も実績値に基づいており、「4. 経済性」のところでは、可燃ごみ収集費用のみ、修正していただきたい。

「5. ごみ行政への理解と協力」について。システム A で、「市民の協力」が 100% というのはおかしい。生駒市のごみ減量への取組に対する理解と協力であり、例えばペットボトル回収率、新聞紙回収率等を調べ、それらの数値で評価するべきでは

ないか。

事務局：回収率を出せるのか。

森住部会長：回収量、生産額、人口などの数値を用いて推計できる。

アルパック：正確に算出するには市で回収した量に加え、自動販売機横の空き缶入れから回収される量なども含めなければならない。1人当たりの回収量で他の市町村と比較することはできる。

中西委員：ここで議論しているのはプラスチック製容器包装である。現在、これは焼却している。そこには協力という概念がないため、100%という数値もありうるのではないか。

森住部会長：私は、施策への協力度、ごみ行政への協力度を示すべきと考える。例えば、宝塚市では、行政による説明会への参加率等も含め評価した。プラスチック製容器包装に限るものではない。どのような指標を採用するかは検討すればよい。100%にすると、何もしない状態で協力度が最も高くなる。

藤堂委員：現在、缶・びん・ペットボトルは分別収集、その他は焼却という状況である。仮に缶・びん・ペットボトルの分別排出協力度が6割として、プラスチック製容器包装分別収集にも6割の協力が得られたとする。そうすると、協力度はプラスチック製容器包装分別収集の開始前も6割、開始後も6割、ということになるのか。

森住部会長：中西委員のご指摘は、1に対して0.5になっているからおかしい、ということかと思われる。1に対して1.5にすればよいのかも知れない。

アルパック：プラスチック製容器包装分別収集を開始することで、「ごみが多かったことに気付いた」「分別にいつそう注意するようになった」という変化が市民に見られることが多い。これによって他の資源物の協力度が上がる波及効果がある程度期待される。そういうものを評価することが、「5. ごみ行政への理解と協力」の項目の狙いと考えている。

森住部会長：分別協力度はモデル地区の結果で出ている。理解度についてアンケートの中で使えそうな項目はないか。

アルパック：分別を実施することによる変化はアンケート項目に入っていないため難しい。

藤堂委員：缶・びん・ペットボトル分別収集の開始時に、意識が変化した等のデータはないのか。それがあれば、同様の効果を期待することができるのではないか。

谷川委員：項目1～4は数字として出てくるものであるが、5は気持ちの問題であり数字として表しにくい。1～4をまず評価した上で、5をプラスアルファとして評価するほうがよいのではないか。

森住部会長：よい案と思う。市民に3つのシステムについてどう思うかアンケートすれば理解度が把握できるが、現状の方法では無理がある。

中西委員：谷川委員の意見に賛成である。項目5について仮に数値を決めたとしても、割り振る配点は低くなるだろう。

森住部会長：では、項目5は数値評価から外すことにしたい。

小林委員：選別費用4万円／トンについて。これは設備投資の減価償却費も含むことが以前の資料に書いてあった。それを記載する必要はないか。

事務局：市内の業者が一から設備投資した場合の見積金額である。これより安い金額もあったが、それは減価償却費を含んでいない場合である。

森住部会長：それなら、そう書けばよい。業者を変えることはできるのか。

事務局：今のところ、市内の業者に委託する方針である。

中西委員：一番高い見積金額である旨を記載すればよい。

森住部会長：では数値は現状でいくことにしたい。次に各システムの評価に移る。宝塚市では3段階で評価した。最も高い点数が3点、次に2点、最低が1点。生駒市では配点をどうするか、ご意見をいただきたい。3点・2点・1点なら順番をつけただけになる。優劣の程度をもっと評価したいのなら10点満点で点数をつける方法もある。

谷川委員：CO₂排出量はかなり差があり、3点・2点・1点よりもっと差をつけたほうがよい。

藤堂委員：全て%にしたらどうか。

森住部会長：ただ、全項目で同じ点数のつけ方をしないといけない。

藤堂委員：評価した結果、仮にシステムAの全量焼却が最も高い点数になれば、プラスチック製容器包装を分別収集していこうとしている生駒市にとっては、望ましくないのではないか。

森住部会長：それは違う。プラスチックのリサイクルに疑問を持つ感覚の人もかなりいる。数値評価はその感覚が当たっているのかいないのかを確認するためのものである。仮に全量焼却が最も高い点数になれば、我々は生駒市に対して、プラスチック製容器包装の分別収集はやめるべきであるという答申を出すことになる。

藤堂委員：仮に私が全量焼却がよいと個人的に考えており、評価結果がそうなるように重み付けのところで「4. 経済性」に多く配分するよう主張したら恣意的にならないか。

森住部会長：それでよい。経済性重視の人、環境重視の人、それぞれが重み付けについて主張し、議論すればよい。

藤堂委員：この6人だけの感覚で決まるのか。

森住部会長：その通り。主観によって重み付け係数が変わり、それが評価結果に大きく影響することを審議会に報告すればよい。審議会でも評価をやらせてもらえばよい。

藤堂委員：今回算出された客観的な数値に基づいて、単に順位をつけるのは客観的になると思う。CO₂排出量について差を出したいのであれば、重み付け係数で大きく配分すればよいと考える。各項目の点数付けでも差をつけ、重み付け係数でも差をつけることになれば、かなり恣意的になる恐れがある。

森住部会長：ご意見は1つの案であると思う。ただ、大きな差が出たものを評価するために、例えば最も悪いシステムを1点、最も良いシステムを100点とし、中間のシス

テムを1～100点の間に位置づけるというやり方もできる。それでも客観的な評価になりうる。

藤堂委員：しかし、単位が違うものを評価しきれないのではないか。順位は自ずと出てくるので順位でよいと思う。

森住部会長：最高点を100点にするという共通の物差しにすれば問題ない。

藤堂委員：では最高点を100点、最低点を1点とし、最高と最低の差を1～100の間に当てはめ、中間点を比率でそこに位置づける、という理解で良いか。

森住部会長：その通り。あと、最低を0点にするか1点にするか、という問題もある。

藤堂委員：この考えでいくのであれば、最高点を100点、最低点を1点とした場合、中間点は何点になるのかという一覧表がほしい。現状では判断しにくい。

小林委員：異なる項目を足し合わせるのに無理がある。足さなければ客観的な結果のみを提示できる。

森住部会長：総合評価というのは、質の違うものを指標化して足し合わせるものである。個々の側面では優劣があるものの、総合的に良いものを採用しよう、という趣旨である。

小林委員：重み付け評価は要るのか。

森住部会長：要る。

中西委員：重み付け評価は要らない、全て同配分でよいという結論になる場合もある。ただ、他の項目を1として経済性を2にしてほしい、CO₂排出量を3にしてほしいという意見もある。そこを議論すればよい。

大内委員：この評価は何のためにするのか。私はプラスチック製容器包装の分別収集は実施するものと思っていた。

森住部会長：疑問を持つ人がいるためである。私たちは感覚的でなく、論理的に説明できるようにする必要はある。

小林委員：CO₂を2に重み付けするという説明はできるのか。

森住部会長：議論の結果、そうなったと説明すればよい。この部分はまさに主観となる。

大内委員：では、システムB-1が最高になるように重み付けをしたらどうか。

中西委員：それもありと思う。ただ、極端な重み付けをすれば不公正となる。良識の範囲でやることになる。

森住部会長：点数は100点満点で算出する方式で、事務局にやっていただきたい。本日は重み付けについて決めたい。「5. ごみ行政への理解と協力」は省くことになったため、4項目での重み付けとなる。均等配分すると25ずつとなる。4項目のうち3項目は環境に関わる項目であり、環境性に75、経済性に25を配分し、環境性を重視したと主張できる。

大内委員：宝塚市の場合は5項目を均等配分したのか。

森住部会長：たまたまそうなった。

小林委員：環境に関わる3つの項目については、どれを重視したらよいのか自分には考え

付かない。この3つの重みは同じと感じる。

中西委員：「1. 省資源性」と「2. 環境負荷性」はデータがあるが、「3. 環境汚染性」はRPFがどこで焼却されるかわからないため適切なデータを得られない。データが不十分な項目に同じ配分をしてよいのか、という問題がある。

藤堂委員：今のご指摘からすれば、「3. 環境汚染性」は評価対象にできないと思った。

森住部会長：そういう考え方もできる。ただ、批判派の方に説明するために、「3. 環境汚染性」の項目は必要である。その対処として、項目としては掲載し、重み付けを5程度に低くするという方法がある。

藤堂委員：100点満点で点数をつける時に、システムAを100、システムB-1・B-2を0にするという考えもできる。

森住部会長：重み付けを5にすれば、100点が5点となる。では、重み付けの案を出していきたい。

①20、20、10、50

②30、30、10、30

③25、25、25、25

④16.6、16.6、16.6、50

以上4案で、実際に計算した結果を次回に提示したい。

アルパック：縦軸の点数のつけ方は技術的な話であるため、森住部会長と相談し、決定したい。

4 閉会

次回は5月21日

この議事録が正確であることを証するため、議事録署名人はこれに署名する。

平成22年 月 日

議事録署名人

議事録署名人